植物（詳細版）

山や森の樹木：

伊勢志摩国立公園の山や森の樹木は、多くが常緑樹です。原生林は、日本で最も重要な神社である伊勢神宮の宮域林にのみ残されています。ここでは、オークの仲間などの常緑広葉樹（照葉樹）やスギ、モミなどの針葉樹が混交しています。ヒノキは自然の形で、あるいは人工林に生育しています。これは、伊勢神宮の式年遷宮と呼ばれる建て替えに使用されます。

伊勢志摩国立公園では、古くから人々が山の木を利用してきたため、二次林が多くを占めています。炭の原料として使用されるウバメガシや、痩せた土地でも生育できるアカマツなどが生育しています。

朝熊山の山頂付近や、菅島の大山では、蛇紋岩質の土壌のために盆栽のような小さいサイズの珍しい植物が生育しています。ジングウツツジといった珍しい植物が見られたりします。

花の美しい植物：

伊勢志摩国立公園では、美しく花さく植物が季節ごとに楽しめます。

ツツジの一種であるコバノミツバツツジは、早春に淡い紫色の花を多数咲かせます。横山園地や登茂山などさまざまな場所で見られます。

日本の固有種であるササユリは、山地や明るい森林に生育しており、6～7月頃に淡紅色の花を咲かせます。志摩市の磯部町などエコシステムの管理が良好な地域で見られます。

伊勢志摩でよくみられる原生植生のひとつであるヤブツバキに関しては、金比羅山で冬に真っ赤な花が咲く樹木のトンネルを楽しめます。

海岸の植物：

志摩市の国府白浜、広の浜などには広い砂浜が存在し、海浜に特有の植物が生育しています。このような場所は海風が砂を移動させたり、塩分が多かったり、強い日差しで乾燥するなどして、一般に植物の生育には適していませんが、海浜植物はこのような環境にうまく適応しています。

ハマユウは高さ 1m 程度に成長する大型の多年草で、7～8 月頃に白色の花を咲かせます。ハマユウは、伊勢志摩国立公園では古くからポスターや切手などの図柄に使用されています。

このほか、五ヶ所湾や英虞湾、的矢湾などの岸边には、ハマボウが 8 月のはじめ頃に黄色い大きな花を咲かせます。

海の植物：

伊勢湾の湾口から志摩市の先島半島の沿岸では、水深が 20～30m 程度の浅い海が広がっており、海底まで日光が届くため、特有の海藻や海草の仲間が生育しています。

磯にはヒジキやテングサなどの海藻が、比較的浅い岩礁地帯にはアラメやアカモクが、さらに深い場所にはカジメの仲間などが生育しています。一方で砂浜や干潟などの浅い砂泥底の海中には、アマモといった海草が生育しています。

植物の珍しい現象：

伊勢志摩国立公園では、生態系の珍しい現象も見ることができます。菅島の大山では、常緑樹であるツゲが真冬になると深紅に紅葉し、辺り一面を濃い赤色に染め、青い海とのコントラストを生みます。これは日本語で「紅ツゲ」と呼ばれ、この普段は常緑の植物が生き生きとした赤色になるのは美しい光景です。このような現象が見られる場所は日本では数箇所しかありません。